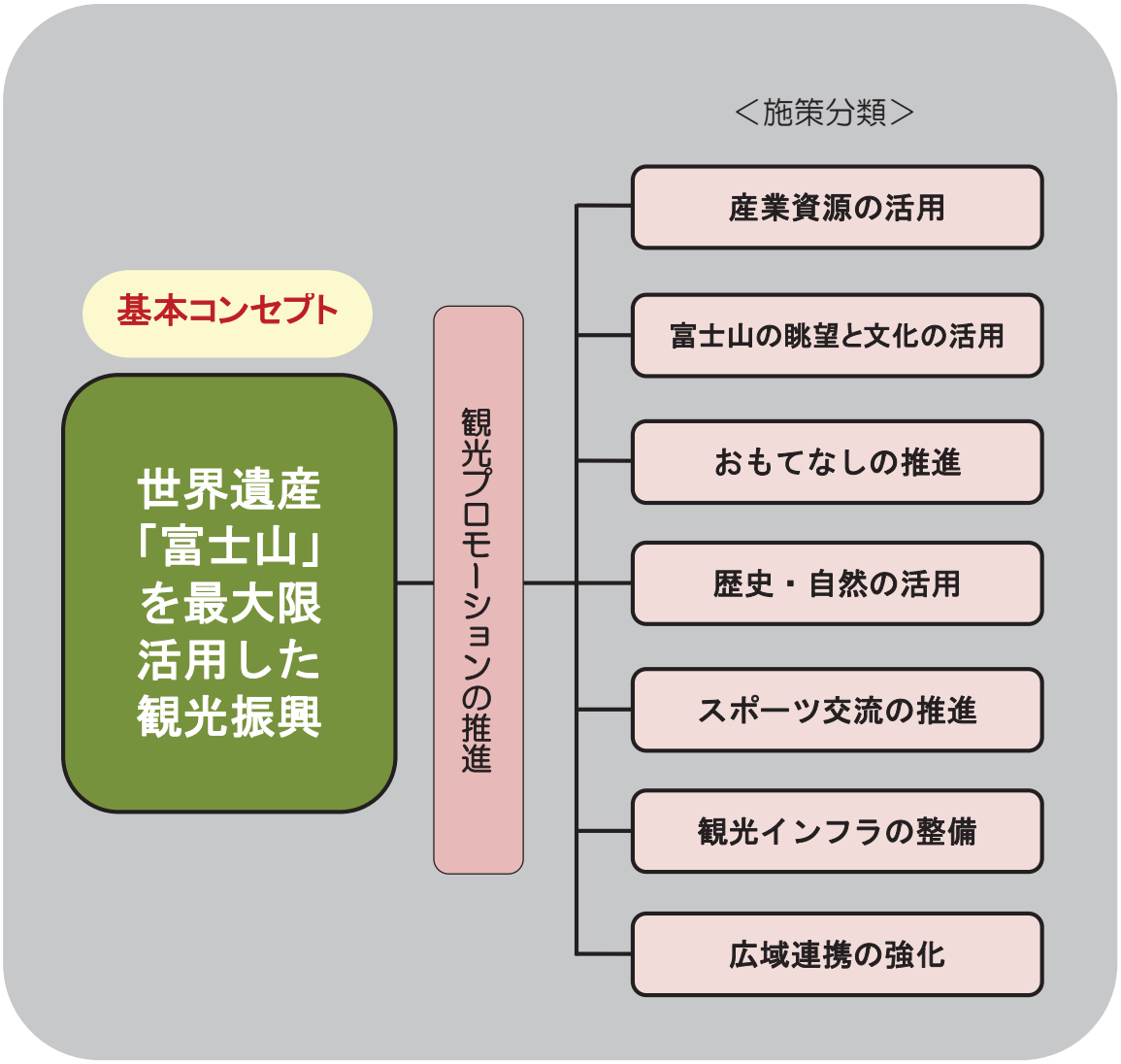
第Ⅵ章　計画における施策分類

本計画においては、これまで区分してきたプロジェクト主体の枠組みを改め、新たな基本コンセプトのもと、実現性、効果性を重視した施策分類を以下に示します。



第１節　産業資源の活用

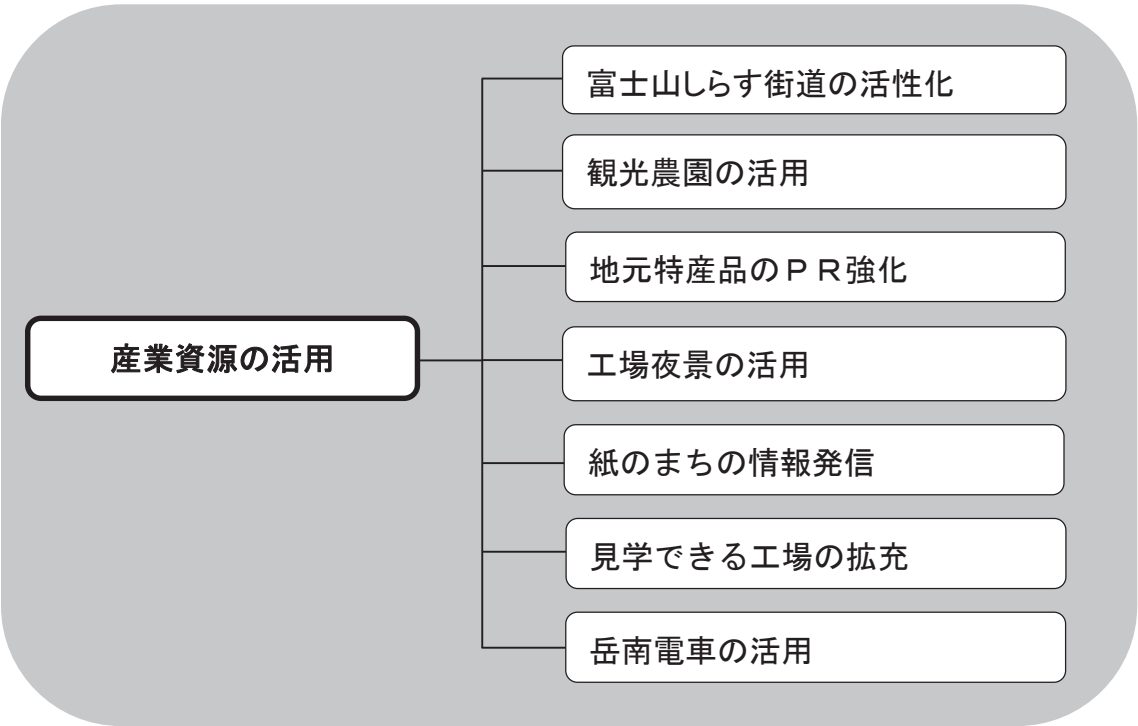
今日、地域に存在する産業素材を活用した産業観光が注目を浴びており、本市においても、工業都市としての魅力を観光に盛り込むことが有効と考えています。

産業観光は、歴史的・文化的に価値のある産業文化財（工場遺構など）や生産現場（工場、農漁場など）及び産業製品等を観光資源と捉え、観光的活用を図るもので、今後の観光振興において期待されるジャンルです。

昨今では、外国人観光客の産業観光への志向も極めて高く、今後、国際的な視点で観光を推進するためにも、産業素材を活用したメニューの開発や産業都市が連携した産業観光ネットワークの強化が必要です。

また、本市における産業資源の活用として、富士山しらす街道を中心とした取組が注目されているほか、ブルーベリー狩りやイチジク狩りなどに対応可能な農園への誘客やツアー商品化への取組が進められています。

今後は、本市の工業都市としての魅力を観光要素として捉え、全国で類を見ない景観を生み出す工場夜景や、製紙産業と共に長い歴史を刻んできた岳南電車の新たな取組も加えた産業資源を観光に活かした事業を展開します。



１ 富士山しらす街道の活性化

富士山しらす街道の取組は、特長ある田子の浦のしらす漁から生み出される「しらす丼」のブランド化と観光ツアーの商品化によって、観光効果が顕著に表れています。

また、６月に開催される「富士山しらす街道フェア」や９月に開催される「田子の浦漁協しらす祭り」の来場者も年々増加しており、今後さらに拡大していくことが期待されます。

一方、現状では、富士山しらす街道とふじのくに田子の浦みなと公園など周辺との回遊が課題となっており、※田子の浦港振興ビジョンと連動した魅力あるメニューづくりが必要です。

今後は、富士山しらす街道へのさらなる誘客促進を図るため、イメージ戦略の一環として、富士山しらす街道の景観整備に取り組むとともに、周辺に残された史実も誘客に活用するなどし、引き続き、首都圏のみならず、中京圏や関西圏に向けた積極的なＰＲ活動を促進します。

※　田子の浦港振興ビジョン：田子の浦港の防災対策の推進と、観光・交流の促進による賑いづくりの創造を目的として、平成 26 年 9 月に策定されたビジョンのこと。

２ 観光農園の活用

本市では、現在、ブルーベリーを中心とした収穫体験を観光素材として、特に大都市圏からの大手旅行会社によるツアーが年々増加していることから、駐車場の整備を含め、ツアー受入に対するより充実した態勢づくりが必要となっています。

今後は、それらの支援を行うとともに、旅行会社等への営業活動及びＰＲを積極的に推進し、観光農園への誘客促進を図ります。

また、既に取り組まれているブルーベリーやイチジクはもちろん、それ以外の農作物にも収穫・食体験の展開の可能性を検討します。

３ 地元特産品のＰＲ強化

現在、全国的に地域ブランドづくりが脚光を浴びている中、本市では、富士商工会議所が推進役となり、世界遺産の富士山の恩恵から生まれた素材や名勝、歴史等をコンセプトに、本市で生産される工業製品や農林水産物等を「富士ブランド」として認定し、全国発信に取り組んでいます。

中でも、食文化のひとつとして開発されたご当地グルメ「富士つけナポリタン」は地元レストランに定着しつつあり、昨今は、これを目当てに訪れる来訪者も増えてきています。

また、富士山の麓に誕生した“紙のまち”をイメージし、富士山の湧水とその湧水で育った米で開発された米粉麺「富士山ひらら等の商品化も進んでいます。

今後は、これらを含め、地元のお土産として定着、支持される特産品のＰＲ強化を促進します。また、ふるさと納税制度を活用した特産品のＰＲを積極的に進めます。

４ 工場夜景の活用

現在、工場群の夜景を見て楽しむ、工場夜景鑑賞の人気が全国的に高まっています。

本市においても、富士商工会議所等が中心となり、本市特有の工場夜景にスポットを当てた取組が進められており、平成２７年度には「全国工場夜景サミット」への参加を予定しています。

本市の工場夜景は、他地域のような重工業地帯ではなく、製紙産業であるという点に特異性があり、特に世界遺産の富士山、田子の浦港、岳南電車等との組み合わせなど、他地域にはない魅力があります。今後は、企業の理解を得ながら、これらを活用し“紙のまち”のイメージを発信し続けるとともに、工場夜景と他の観光素材や食を絡めたメニューづくりなどを積極的に支援します。

５ 紙のまちの情報発信

トイレットペーパーの生産量日本一を誇る本市にとって、紙産業は欠かすことができない財産であり、“紙のまち”らしく「富士山紙フェア」や「紙のアートフェスティバル」等のイベントが定期的に開催されています。また、ステーションプラザＦＵＪＩで開催されている「全国紙バンド手芸作品展」では、全国から数多くの愛好家の作品が展示され、多くの人で賑わっています。

これら本市ならではのイベントを、全国に向けて積極的に情報発信するとともに、「紙のまち富士市」を効果的に発信できる取組を進めます。

６ 見学できる工場の拡充

工場見学は、テレビや雑誌で特集されたり、旅行会社がツアーとして企画したりするなど、大人から子どもまで楽しめるものとして注目されており、これらのニーズに応える受け皿の確保が必要です。

本市には、数多くの工場が点在していることから、製紙工場や紙加工産業をはじめ、“工芸”、“食”などさまざまな分野の工場において活用可能な場所の確保に努めます。

７ 岳南電車の活用

全長９．２ｋｍの岳南電車は、街中や工場敷地内を走ることから、景色や町並みとの距離も間近で、暗闇の中から浮かび上がる電車や駅舎、昔懐かしい車窓の夜の風景が特徴です。

レトロ感漂うこの電車に、工場夜景や湧水巡りなどとの連携や富士山の眺望とセットで沿線の駅ごとに魅力づくりを行う事で、観光的価値を高めることが可能であると考えます。

併せて、全国の鉄道愛好家をはじめ、“旅”を愛する人々に向けての情報発信を強化するなど、岳南電車を活用します。

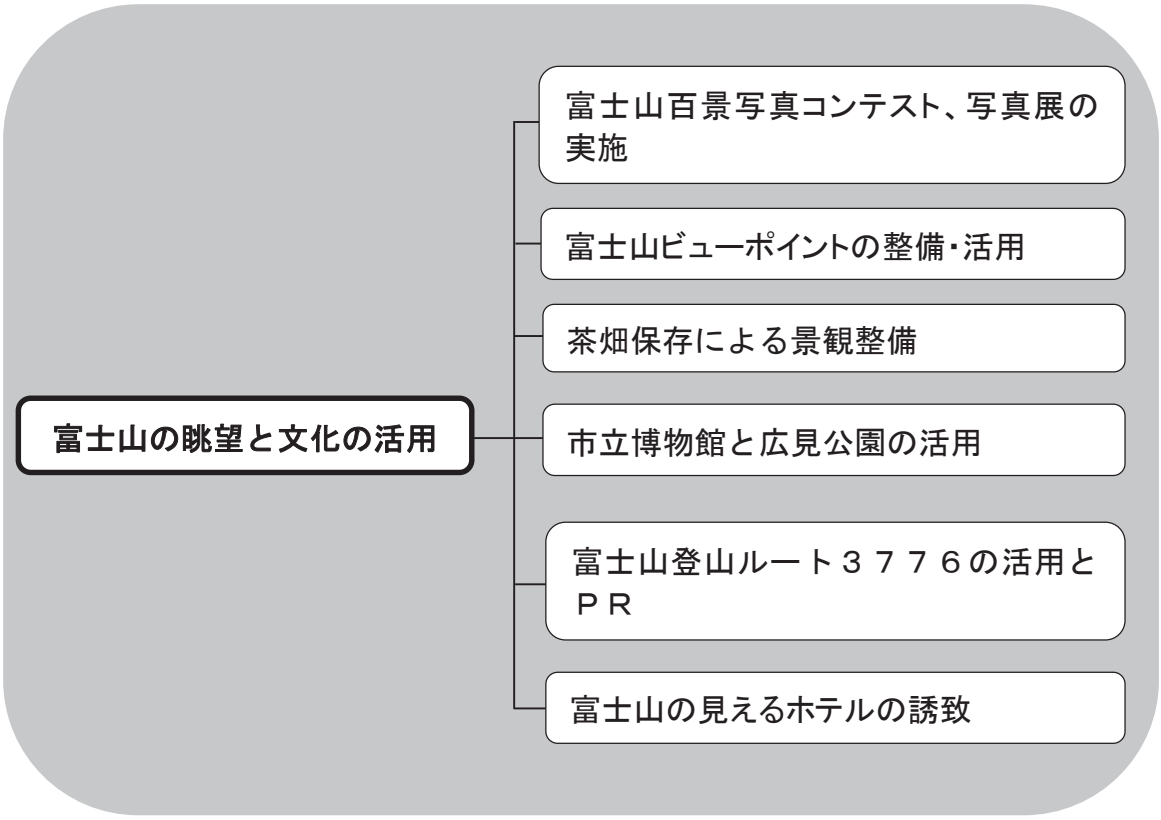
第２節　富士山の眺望と文化の活用

本市は、これまで富士山の眺望を活用した取組として、平成１７年度から「富士山百景写真コンテスト」を実施するとともに、コンテスト入賞作品を県内外の会場で展示する「富士山百景写真展」を開催するなど、富士山の眺望が美しいまち富士市のＰＲと誘客を進めてきました。

富士山は、古来より日本の象徴であり、多くの日本人から愛され続けるとともに、海外でも人気や知名度の高い山となっています。さらに、平成２５年の世界文化遺産登録によって、その人気や知名度は国内外を問わずこれまで以上に高まりました。

このような状況の中で、本市が富士山を構成する自治体の一つであり、その中でも、駿河湾の海抜０ｍから富士山頂の３，７７６ｍまでを仰ぎ見ることができる唯一のまちであることは、富士山をテーマに観光を進めていくうえで最大の強みです。

今後は、富士山の知名度や人気を本市のイメージや誘客に直接結び付けるため、既存の取組に加え、観光客が本市に足を運びたくなる新たな仕組みづくりを構築するとともに、世界文化遺産である富士山の文化的側面を活用した本市ならではの事業を展開します。



１ 富士山百景写真コンテスト、写真展の実施

平成２６年度で１０回目を迎えた「富士山百景写真コンテスト」は、毎回全国から２，０００点以上の応募があるとともに、「富士山百景写真展」開催都市からの応募が年々増加し、コンテストと写真展の相乗効果による情報発信やプロモーションを展開しています。

今後、さらなる誘客拡大を図るためには、ＰＲ方法や募集内容等を再検討する必要があります。

また、写真展については、開催都市や開催回数、時期等を拡充するなど、より効果的なＰＲ活動を促進します。

２ 富士山ビューポイントの整備・活用

富士山の眺望を活用するには、「富士山百景写真コンテスト」や「富士山百景写真展」に加え、観光客が本市へ足を運びたくなる新たな仕組みが必要です。

このため、過去のコンテスト応募数で上位の撮影エリアを「富士山ビューポイント」として設定し、標識等の設置を行います。

また、ビューポイント間の回遊性を高める仕組みとして、「富士山百景写真コンテスト公式ガイドブック」をはじめ各種チラシ・パンフレット等にビューポイントを掲載し、富士山の眺望を活用した誘客活動を促進します。

３ 茶畑保存による景観整備

大淵笹場の富士山と茶畑の風景は、日本を代表する本市ならではの資源ですが、茶畑を維持管理する後継者不足等の課題に直面しており、美しい景観を維持するための取組が必要です。

また、観光客を受け入れるための環境整備も喫緊の課題と捉えており、年々増加する写真愛好家や今後増えると予想されるツアーバスへの対応も検討する必要があります。

このため、茶畑の景観保全と受入態勢の整備を進めるため、大淵地区と協働した取組を進めます。

４ 市立博物館と広見公園の活用

市立博物館では、平成２８年度に「富士山信仰とかぐや姫伝説を一体化した展示」をテーマにリニューアルオープンが予定されています。

また、博物館が建てられている広見公園は、本市の歴史、産業や文化を象徴する「歴史ゾーン」をはじめ、水や緑を基調とした「修景ゾーン」などに分かれ、特にバラ園から望む富士山は絶景であり、バラの見頃の時期には、数多くの観光客が県内外から訪れるなど、本市を代表する公園です。

今後は、博物館の“学術機能”と広見公園のもつさまざまな魅力による相乗効果を高め、東名・新東名高速道路からのアクセスが容易な立地を活かした観光誘客を図るとともに、駐車場の整備など来場者の利便性を高めるための取組を進めます。

５ 富士山登山ルート３７７６の活用とＰＲ

本市は、海抜０ｍから富士山のほぼ９合目にあたる３，４２１ｍまでを有するとともに、市内には富士山や富士登山にまつわる史跡等の文化財をはじめ、立寄りスポットが点在しています。

そこで、富士山の世界文化遺産登録を契機に、文化的側面に着目した富士市ならではの取組として、富士市を起点にした「（仮称）富士山登山ルート３７７６」を設定し、新たな観光客の掘り起こしを行うとともに本市のＰＲ活動に積極的に活用します。

また、立ち寄る場所やトイレ等を含めた休憩場所の確保を図ります。

６ 富士山の見えるホテルの誘致

本市は、富士山に隣接している市町村の中で駿河湾の海抜０ｍから富士山頂の３，７７６ｍまでを仰ぎ見ることができる唯一のまちです。本市ならではの眺望を活かした宿泊施設等の誘致・留置は、本市の観光客受入態勢の充実はもとより、新たな観光客の掘り起こしと、地域経済への波及効果も大いに期待されます。

今後は、“富士山が見える”を売り物にした宿泊施設に対する観光ニーズや建設立地の可能性、課題等について検討し、ホテル等の宿泊施設の誘致・留置を推進します。

第３節　おもてなしの推進

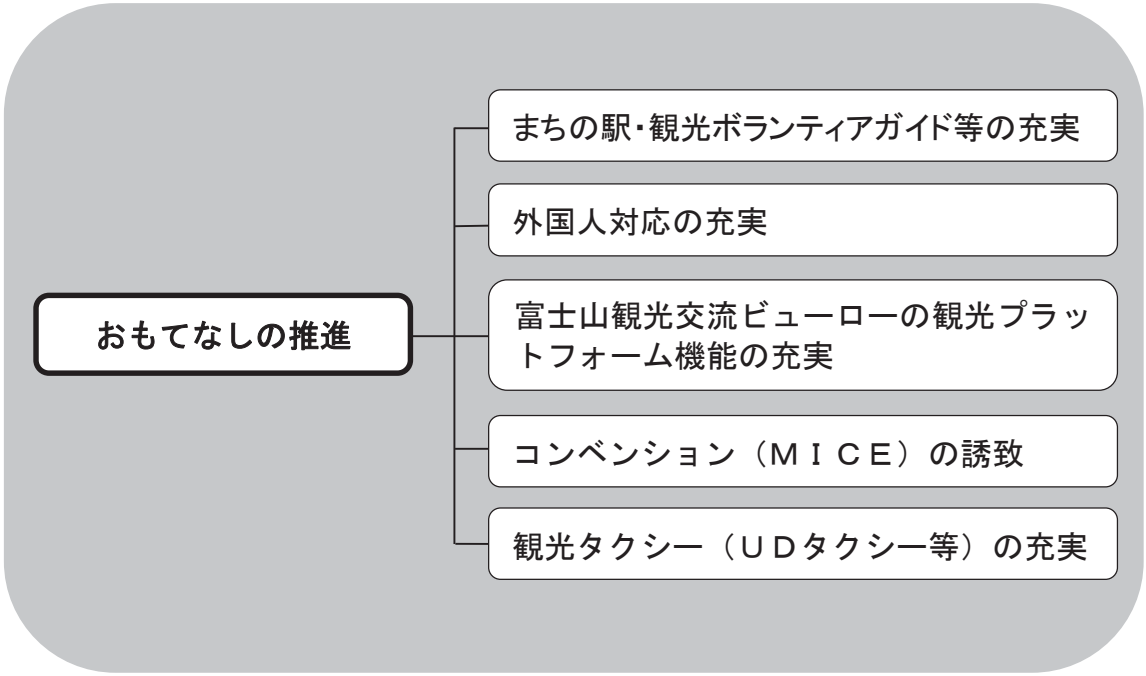
本市は、富士市まちの駅や富士市観光ボランティアガイドの会等と連携しておもてなしを推進し、“おもてなし文化の確立”に大きな成果を挙げてきました。

観光客の満足度を高めるおもてなしは、観光都市としての魅力を高め、リピーター客の拡大を促し、新たな観光誘客に繋がることから、これらを推進することは観光活性化における重要な課題のひとつです。

また、昨今では、本市を訪れる外国人観光客が増加しており、外国人観光客へのおもてなしの充実も必要です。

さらに、観光客のニーズの多様化から、画一的なおもてなしではなく、心のこもったものであるとともに、ホスピタリティの高いものであることが求められています。

今後は、本市を訪れたすべての観光客がまた訪れたいと思うような都市となるよう、地域のおもてなし最前線である富士市まちの駅ネットワークや富士市観光ボランティアガイドの会、富士山観光交流ビューロー等との連携を強化し、本市ならではのホスピタリティ溢れるおもてなしを推進します。



１ まちの駅・観光ボランティアガイド等の充実

本市のおもてなしは、現在、６４駅にまで拡大した富士市まちの駅ネットワークと富士市観光ボランティアガイドの会や富士川観光ガイド協会が担っています。

まちの駅は、比較的小規模な事業所が多く様々な特色があり、今後もこれまで以上に、個々の駅の特性を活かしたおもてなしを推進していくとともに、おもてなし水準の向上を図っていく必要があります。

多様化する観光客のニーズに的確に対応したおもてなしの提供をしていくため、今後は、おもてなしの最前線であるまちの駅や富士市観光ボランティアガイドの会をはじめ、すでに各地域に定着している富士山博覧会（フジパク）などの活動との連携強化に向けた活動を支援します。

さらには、観光ボランティアの十分な確保をはかるため、人材の育成に対する取組を進めます。

２ 外国人対応の充実

富士山の世界文化遺産登録を契機に、本市を訪れる外国人は年々増加しています。

平成３２年（２０２０年）の東京オリンピック・パラリンピックの開催を控え、さらなる増加が期待される外国人観光客に対しては、文化や風習の違いを理解した取組など、国際的な視点でのおもてなしをこれまで以上に充実させていく必要があります。

このため、市内の観光スポットにおける案内看板や観光パンフレットの多言語化を推進します。また、ウェブサイトを利用した情報発信の強化や※Free Wi-Fiの導入エリアの拡大、観光案内所の英語による観光案内の充実等、外国人のニーズに応じた多様な観光案内の整備を進めます。

※Free Wi-Fi：ＰＣやスマートフォン、タブレットなどを利用し、通信事業者と契約していなくても、無料でインターネットに接続できるサービスのこと。

３ 富士山観光交流ビューローの※観光プラットフォーム機能の充実

富士山観光交流ビューローは、地域の観光情報や観光事業者等の取組の集約窓口であるとともに、こうした情報をもとに本市の着地型旅行商品の提供者と旅行会社を繋ぐ窓口として観光プラットフォーム機能を担うとともに、本市の観光の実務を担う拠点です。

地域への誘客の拡大に結びつくことが期待される観光プラットフォーム機能は、本市の観光振興に大きな役割を果たすものであり、魅力ある観光素材などの集約と効果的なセールス活動の実施体制の強化に向け、引き続き富士山観光交流ビューローに対し積極的な支援を行います。

また、富士山観光交流ビューローの持つ情報発信機能を活用し、観光客のニーズに合った利用しやすい観光マップの作成等、観光客の目線に立った観光情報の提供を推進します。

※　観光プラットフォーム：着地型旅行商品の提供者と市場（旅行会社、旅行者）を繋ぐ、ワンストップ窓口としての機能を担う事業体のこと。

４ コンベンション（ＭＩＣＥ※）の誘致

今日、グローバル化に対応した観光戦略のひとつであるＭＩＣＥの誘致については、大きな経済効果が期待され、本市としても受け皿づくりを強化し、積極的なアプローチを図る必要があります。

また、本市がＭＩＣＥの推進を図っていくためには、ＭＩＣＥの推進母体である富士山観光交流ビューローとの連携を強化し、富士山を背景とした本市独自の魅力を打ち出しながら、他地域と差別化した支援メニューの開発・充実に取組む必要があります。

今後は、本市に適した１００から２００人程度の来訪者の受入態勢の整備や、教育旅行の誘致活動の強化、訪日外国人誘客のための外国メディア活用による情報発信の強化等、ＭＩＣＥ誘致に向けた取組を強化します。

※　ＭＩＣＥ：企業等の会議（Meeting）、企業等の行う報奨・研修旅行などのインセンティブ旅行（Incentive Travel）、国際機関、団体、学会等が行う会議（Convention）、展示会・見本市、イベント（Exhibition/Event）の頭文字を示したもの。

５ 観光タクシー（ＵＤタクシー等※）の充実

本市を訪れる観光客は、年々増加しており、国籍、年齢、性別等が多様化しています。本市を訪れる全ての人が本市の魅力を満喫できるよう、快適な受入環境を整備することは、今後の観光交流の発展に繋がる重要な取組です。

本市においては、バスや鉄道といった公共交通機関が利用しにくい状況にあり、観光タクシーは、観光地を巡る手段として非常に有効であることから、富士山観光交流ビューロー、静岡県タクシー協会富士富士宮支部等とともに観光用タクシーの利便性の向上について検討するとともに、誰もが利用しやすく、すべての人にやさしいＵＤ（ユニバーサルデザイン）タクシーの充実を促進します。

※　ＵＤ（ユニバーサルデザイン）：文化・言語・国籍の違い、老若男女といった差異、障害・能力の如何を問わずに利用することができる施設・製品・情報の設計（デザイン）のこと。

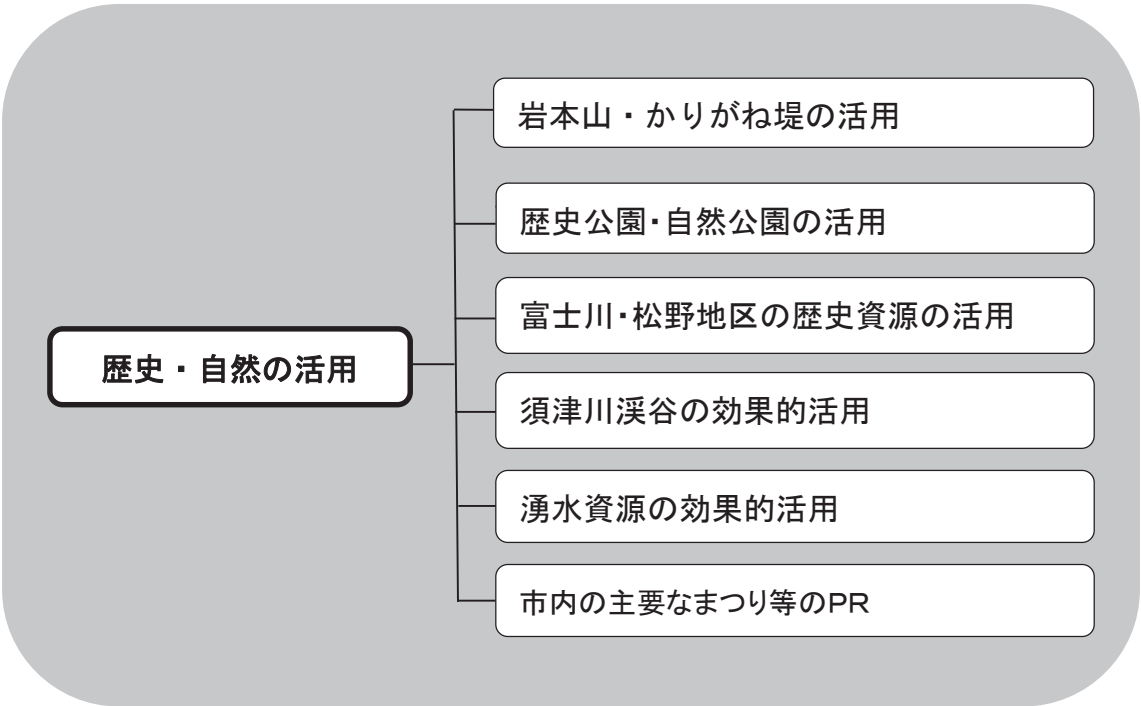
第４節　歴史・自然の活用

本市には、全域に点在する歴史的建造物をはじめ、須津川渓谷に代表される豊かで美しい自然、富士山を望む景観スポットなど、地域資源が数多くあり、観光的価値は十分にあると考えています。

また「かぐや姫伝説」伝承の地として、かぐや姫にゆかりのある名所等も観光資源として一翼を担っています。

岩本山公園やかりがね堤などでは、富士山の景観や、美しく咲き誇る梅、桜で賑いを見せています。そのほかにも、市民の花である「バラ」が見事に植栽された広見公園や中央公園など、来訪者に誇れる公園が多数あります。

これらの観光資源は、誘客を図るうえで、情報発信に加えて、保全も課題であり、歴史・伝統文化・自然・景観を市内外に効果的に発信すると同時に、これらが本市の財産であることを認識し、保全を図ることで、富士市ならではの地域資源を活用した施策を推進します。



１ 岩本山・かりがね堤の活用

富士山を背景にした岩本山公園は、冬の梅、春の桜、初夏の紫陽花、秋の紅葉など、四季を彩る自然が楽しめる公園です。２月から４月にかけては、“梅”、“桜”、“富士山の眺望”にスポットを当てた期間イベント「絶景★富士山　まるごと岩本山」を開催するなど、毎年、多くの観光客が訪れています。

また、かりがね堤では、３月下旬から４月上旬には桜、９月にはコスモスが咲き誇り多くの写真愛好家の訪れるスポットであり、また、毎年１０月に投げ松明で有名な「かりがね祭り」が開催されています。

これらスポットの観光シーズンは、時期が限定されてしまうことから、岩本山とかりがね堤それぞれの取組を個別の観光素材として捉えるのではなく、それぞれの魅力を活かし、組み合わせることで、通年型の観光誘客を目指します。

２ 歴史公園・自然公園の活用

市内には、かぐや姫伝説の伝承の地として知られる竹採公園や、代官屋敷、長屋門、明治期の洋館などが移築復元されている広見公園など、歴史をテーマとした公園が整備されています。さらに、富士山信仰の拠点のひとつであった富士山東泉院跡に隣接する吉原公園では、このような歴史資源を活用した公園づくりを行っています。

また、浮島沼の湿原を保存するための浮島ヶ原自然公園、自然休養林の中でキャンプ利用も可能な丸火自然公園などの自然公園や、街の中心にありながら、自然と豊かな緑を満喫できる中央公園など、各種の公園が存在しています。

こうした魅力や個性あふれる公園を、市外からの来訪者による観光利用を促すよう、効果的な活用方策について検討します。

３ 富士川・松野地区の歴史資源の活用

富士川・松野地区には、かつて舟運と渡船で繁栄した面影が数多く残されており、名所旧跡、歴史建造物などといった観光資源も豊富に存在しています。

これまで本市では、これらを巡るイベント等への支援を行うとともに、誘客性の高い素材の確認やコース設定、また隠れた観光資源の掘り起こしを行い、ガイドマップの作成などに取組みました。

今後は、修復が必要な歴史建造物の保全、整備を進めるとともに、富士川楽座に立ち寄った観光客等へのアプローチを図るほか、ツアーバスの立ち寄り可能な受入態勢の整備等も視野に入れ、観光振興を図ります。

さらに、富士市商工会の観光戦略研究会の取組とも連携し、富士川・松野地区以外の観光素材とも組み合わせた誘客メニューの開発などを行います。

４ 須津川渓谷の効果的活用

愛鷹山系随一の絶景と言われる須津川渓谷は、新緑、紅葉ともに美しく、四季折々の自然美が楽しめ、上流には落差２１ｍの大棚の滝があり、キャンプ場も設置されています。

しかしながら、豪雨、台風等の災害時には、アクセス道等において落石や土砂崩れが発生しており、利用者の安全確保が最大の課題です。

このため、本市では、自然美豊かな須津川渓谷を有力な観光資源として捉え、安全性の確保、自然環境の保全を行うとともに、誘客性を高めるための取組を推進しバランスのとれた観光活用を目指します。

５ 湧水資源の効果的活用

本市の東部地域には、富士山や愛鷹山から流れ出る湧水源が多くあり、昔から地域の人々の生活用水や製紙業を中心とした産業などに利用され、大切に守られてきました。

これらの湧水地域を総称して「泉の郷」と呼び、かぐや姫伝説にちなんだ竹採公園をはじめとする、歴史的名所も結びつけたウォーキングコースを設定しました。

このような、地域特有の資源を更に活かすため、湧水源の情報の整理、案内機能強化、ウォーキングコースの機能向上と新たなコースを検討するとともに、効果的な情報発信等を推進し、観光誘客を図ります。

６ 市内の主要なまつり等のＰＲ

本市では、年間を通じて各種の祭事・イベントが数多く開催されています。

東海一の祇園と称される「吉原祇園祭」、富士本町を舞台とした「甲子神社祭典」、日本三大だるま市として知られ、市内外から数多くの参拝客が訪れる「毘沙門天大祭」のほか、市民に定着している「富士まつり」「あっぱれ富士」などが集客性の高い代表的なイベントであり、本市の観光振興に大きく寄与しています。

今後は、LINE（ライン）、Twitter（ツイッター）、Facebook（フェイスブック）に代表されるＳＮＳ（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）等を活用した口コミの拡大など、全国レベルでの情報発信に取り組むとともに、増加する訪日外国人旅行者に対しても、本市ならではの伝統文化を発信することで、誘客の促進を図ります。

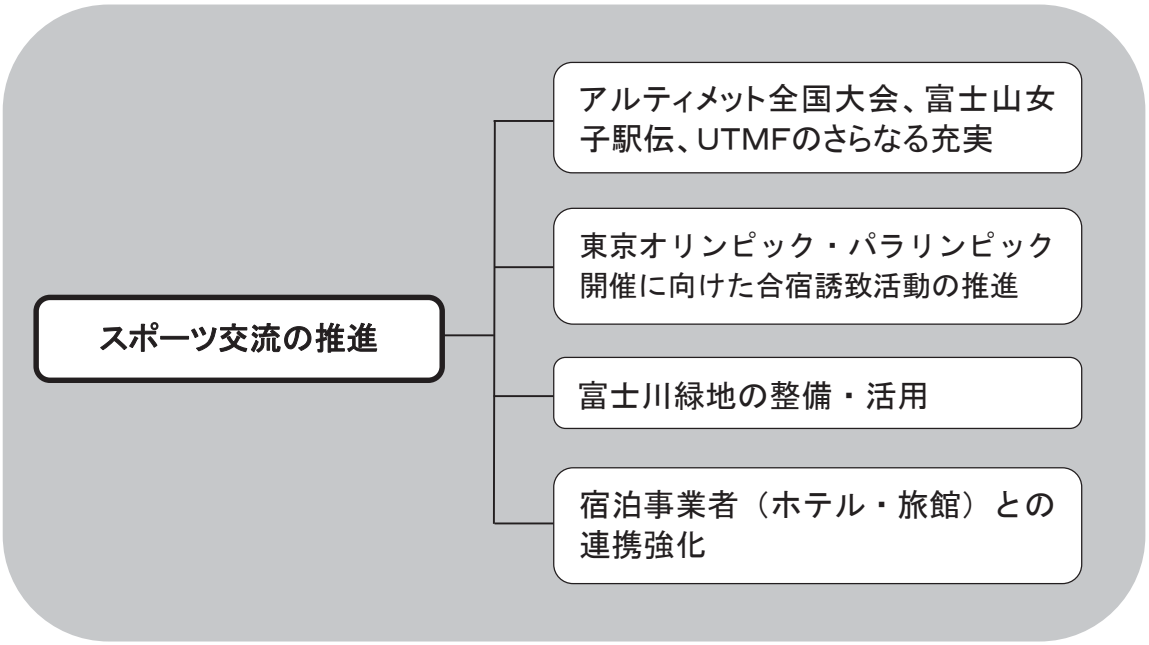
第５節　スポーツ交流の推進

本市では、アルティメット競技に代表される全国規模のスポーツ大会が定期的に開催されてきており、宿泊を含め安定した誘客に繋がるなど、スポーツ交流による経済効果が生まれてきています。

こうした中、平成３２年（２０２０年）の東京オリンピック・パラリンピック開催が決定したことから、国や県などと連携し、各国代表チームによる事前合宿の誘致に積極的に取り組んでいく必要があります。

また、現在、アルティメットをはじめとした全国大会の会場にもなっている富士川緑地については、大会の開催にあたり課題となっているグラウンドや駐車場を含む、緑地の再整備に取組む必要があります。

今後も、これまで各種大会の誘致開催に中心的な役割を担ってきた富士市ホテル旅館業組合等との連携を強化し、富士山を背景にしたスポーツ交流の推進を図ります。



１ アルティメット全国大会、富士山女子駅伝、UTMFのさらなる充実

本市では、毎年、全日本アルティメット選手権大会が富士川緑地を会場に行われ、富士山の風景も楽しめると好評を得ているほか、参加選手による市内への宿泊も期待できるイベントとなっています。

また、富士山を会場に、国内最大のトレイルランの大会であるＵＴＭＦ（ウルトラトレイル・マウントフジ）が開催されており、世界各国から多くの選手や関係者が訪れるほか、平成２５年から開催された富士山女子駅伝は、全国にテレビ放映されるなど、本市のシティプロモーションにも寄与しています。

今後も、富士山の麓である本市を舞台に、このような魅力あるスポーツイベントが、継続的に開催されるよう、県や周辺市町はもとより、主催者との緊密な連携を図り、受入態勢の強化・充実を図ります。

２ 東京オリンピック・パラリンピック開催に向けた合宿誘致活動の推進

平成３２年（２０２０年）の東京オリンピック・パラリンピック開催にあたり、日本国内を中心に、各国の選手団による事前合宿が行われることから、本市としても、国や県などと連携し、周辺の自治体と施設や機能などを補完し合うとともに、対象の国や競技種目を絞りながら誘致を推進します。

特に、世界遺産富士山を背景にした、本市の特性についてＰＲを行い、県富士水泳場を活用した、競泳、飛込、シンクロナイズドスイミング等の水泳競技を中心に、県がメインターゲットにすえるモンゴルや台湾以外の国々も視野に入れた誘致も検討します。

３ 富士川緑地の整備・活用

富士川緑地では、アルティメット競技の全国大会が実施されているほか、サッカー場、ソフトボール場、野球場などが整備され、様々な大会が行われていますが、各種の大会の運営に際し、グラウンドの再配置や再整備、駐車場の適正台数等の確保が課題となってきています。

このため、今後は「富士川左岸緑地基本計画」に基づき、緑地の再整備を進めるとともに、右岸の整備を図り、各種大会開催の利便性の向上を図ります。

４ 宿泊事業者（ホテル・旅館）との連携強化

これまで、本市のスポーツ交流のメインとして行われてきた、アルティメットをはじめとする各種競技の全国大会の開催については、富士市ホテル旅館業組合が中心となり、積極的な誘致を行ってきました。

こうした全国規模の大会は、交流人口の増加や、宿泊や飲食を通じ、地域経済の活性化に繋がることから、今後も、富士市ホテル旅館業組合との連携を強化し、各種スポーツ大

会や合宿等を誘致する取組みとともに、大会参加者の滞在延長等に向けた仕組みづくりに取組みます。

また、大規模な大会開催などにより、市内の宿泊施設では、参加者の収容ができない場合は、周辺市町のホテル旅館業組合と連携し受入態勢の強化を図ります。

第６節　観光インフラの整備

さらなる観光振興を図るためには、本市の魅力を活かすハード・ソフト両面における総合的な整備を推進する必要があります。

特に、ハード面では、富士山や田子の浦港等の景観や歴史性に配慮した取組が求められ、加えて、観光スポットへのアクセスの向上や必要性に応じたトイレや駐車場の整備も検討する必要があります。

また、平成２６年９月に策定した「田子の浦港振興ビジョン」や、「内陸フロンティア構想」の進捗による観光施策の展開も念頭に置く必要があります。

開業以来５，０００万人を超える利用客を誇る道の駅富士川楽座や、毎日多くの利用者で賑わう新富士駅都市施設（ステーションプラザＦＵＪＩ）などの観光拠点は、建物の老朽化が進んでいることから、計画的、効率的、効果的な施設の維持改修を行うとともに、積極的な活用を図ります。

さらに、情報化社会が進展する中、情報インフラや案内標識の充実など、利用者の視点に立った対応策を実施します。

観光インフラの整備

- 観光ポイントにおけるトイレ及び駐車場等の整備
- 田子の浦港周辺の賑わいづくり
- 内陸フロンティア構想に基づく観光拠点整備
- 観光スポットへのアクセス向上
- 富士川楽座、ステーションプラザＦＵＪＩの計画的な施設改修と活用
- 情報インフラの整備
- 観光案内看板の整備等

1 観光ポイントにおけるトイレ及び駐車場等の整備

本市の観光ポイントには、観光バスの受入可能な駐車場やトイレの設置が十分ではありません。また、富士山東泉院跡に隣接する吉原公園では、市営駐車場が隣接していることから、利用が期待できるものの、大型バスの利用は困難な状況にあります。

それ以外の観光ポイントにおいても、受入環境の充実を図っていくことが今後の観光振興にとって重要な要素となることから、設置効果を踏まえ、駐車場等の整備を進めます。

2 田子の浦港周辺の賑わいづくり

田子の浦港の整備については、特色ある拠点づくり、富士山と港の景観形成、回遊性の強化、情報発信の強化を柱として、漁港周辺を“水産”、“食”を中心とした賑わい機能充実を図るため、野外フードコート整備や海産物の飲食・販売施設等の立地を促進するとともに、富士山や工場夜景等のビューポイントの整備・活用によるエリア内のネットワーク化等を進めます。

また、フェリー乗り場跡地とふじのくに田子の浦みなと公園間のプロムナード化に取り組むとともに、夜景など夜をテーマとした観光商品づくりを初め、田子の浦漁協しらす祭や富士山しらす街道フェア及び遊漁船等、漁港を活かした観光振興を推進します。

3 内陸※フロンティア構想に基づく観光拠点整備

本市においては、「富士山を眺望する観光拠点」が内陸フロンティア構想に位置付けられており、今後の本市発展に繋がる重要な取組であるとともに、その実現に期待が寄せられています。

このような取組を、観光交流の促進、まちの賑いの創出に活用できるよう、早急な実現化のための働きかけを行います。

※ 内陸フロンティア構想：県が推進している構想で、新東名高速道路などの高規格幹線道路を最大限活用し、内陸部に災害に強く魅力ある先進地域を築くとともに、都市部を防災・減災に対応した地域に再生し、両地域間の連携と相互補完による均衡ある発展を促し、南海トラフの巨大地震などの有事に備えた地域づくりモデルの形成を目指しているもの。

4 観光スポットへのアクセス向上

本市においては、東海道新幹線新富士駅と東海道線富士駅が離れていること、また路線バスでの乗り継ぎや、他の交通手段の利用環境が十分でないことなど、交通アクセスに課題があります。

観光振興においては、自動車の利用のみならず、鉄道や路線バスなどの公共交通機関の利用を促進する必要があります。

このため、今後の富士登山や市内観光ポイント等への移動手段として、路線バスやコミュニティバス、タクシーの観光利用に取り組むとともに、レンタサイクル活用への対応を充実します。

５ 富士川楽座、ステーションプラザFUJIの計画的な施設改修と活用

平成１２年に開業した道の駅富士川楽座は、富士川と富士山はもとより、駿河湾、伊豆半島までを一望できる場所に立地しており、東名高速道路と一般道路からアクセスできることから、年間３００万人を超える利用客を誇る道の駅です。

また、ステーションプラザＦＵＪＩは、昭和６３年に新富士駅開設と同時に富士市の玄関口としてオープンした、多くの人で賑わう施設です。

今後は、計画的な施設改修等を実施するとともに、市内の観光スポットへの積極的な誘導を進めるなど、施設の立地的特長を活かした取組を進めます。

６ 情報インフラの整備

今日、スマートフォン等情報端末が普及し、特に訪日外国人旅行者の国内移動においては、Free Wi-Fiなどの情報インフラが整備されている場所を探して行動する傾向があります。このことから、観光誘客及び観光サービスを促進しようとする地域においては、早急な対応が求められています。

本市においても、来訪者の満足度の向上と効率の良いプロモーション活動を促進するため、観光スポット等へのFree Wi-Fiの整備を図るとともに、デジタルサイネージ（電子看板）の導入も検討します。

７ 観光案内看板の整備等

一般道路等における案内標識は、観光スポットへの誘導方法として、有効かつ効率の良い手法であることから、観光振興には必要不可欠なインフラであり、来訪者の立場に立った表示方法も重要な要素です。

このため、既存看板のメンテナンスを確実に実施するとともに、外国人観光客にも分かりやすい、外国語の併用表記も進めます。

また、世界遺産の富士山の麓といった立地特性にふさわしいデザイン等を考慮し、活用効果の高い看板整備を図ります。

第７節　広域連携の強化

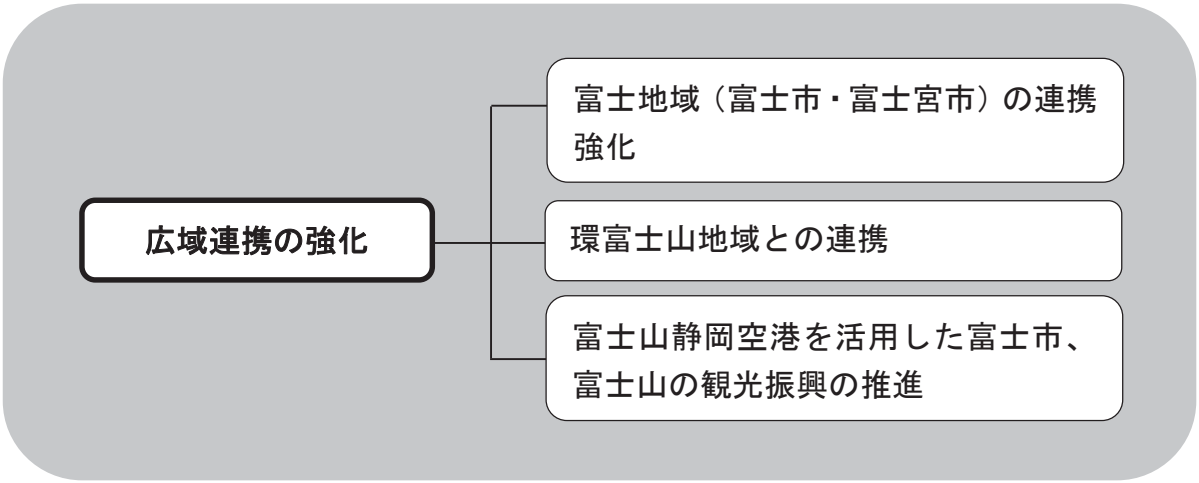
旅行者の移動範囲の広がりや、観光ニーズの多様化に伴い、これまでも、各地域や観光エリアが広域に連携し、相互の観光資源を結びつけ、広域エリア全体の魅力を高める取組が進められてきました。

こうした中、富士山の世界文化遺産登録により、富士山周辺地域に対する国内外からの関心がますます高まってきており、富士山の周辺に位置する自治体がこれまで以上の連携を図り、観光誘客の促進に取り組んでいく必要があります。

現在、本市と富士宮市では、両市への誘客促進を図るため、「富士地域観光振興協議会」を組織し、首都圏での観光キャンペーンをはじめ、台湾からのインバウンド促進に向けたプロモーション活動などを積極的に展開しています。

また、環富士山周辺等の４市３町で構成する「富士地区観光協議会」でも、各地域の魅力を集約し広域のメリットを活かした施策に取り組んでいます。

この他にも、県を越えての広域連携組織や、富士山静岡空港の利用促進を目的に組織された団体などにより、様々な広域連携の取組が行われていますが、今後も、市や県の区別なく広範なエリアを巡る観光客のニーズに的確に応えていくうえで、広域連携の強化が必要不可欠です。



１ 富士地域（富士市・富士宮市）の連携強化

本市と富士宮市とは、地理的にも、歴史的にも関係が深く、共通の文化と生活圏をもつことから、これまで、観光誘客においても、相互に連携した取組を行ってきました。

今後も、富士地域観光振興協議会が中心となり、宝永火口トレッキングなどの新しい富士山の楽しみ方をはじめとした本地域の魅力をＰＲするため、引き続き観光キャンペーン等のプロモーション活動を展開していく必要があります。

また、インバウンドを推進するため、これまで展開してきた台湾からの誘客促進を目的とした現地旅行会社へのセールス活動等の取組を一層推進するほか、県等と連携し、東アジアを中心に、今後、富士山周辺へのインバウンドが期待できる国や地域へのアプローチが必要です。

このような事業の推進にあたり、行政機関の連携はもとより、富士山周辺観光の玄関口である、新富士駅、富士宮駅で観光案内と、誘客促進に取り組む富士山観光交流ビューローや富士宮市観光協会との緊密な連携がことさら重要であり、強固な協力体制による事業展開を図ります。

２ 環富士山地域との連携

広域連携の推進にあたり、富士宮市のみならず、より広範なエリア間での連携も必要とされており、現在、富士地区観光協議会（富士市・富士宮市・御殿場市・裾野市・小山町・清水町・長泉町）では、スマートフォンを活用し、各市町の観光施設や立ち寄りポイントを集約し、エリア全体の魅力を効果的に国内外に情報発信する取組を行っています。

そのほか、富士山の自然環境の保全と観光活用の両面を目的とした連携組織や、県境を越えたエリアを対象とした広域団体などが存在しており、富士地域に限らず広い範囲を移動する観光客のニーズを的確に捉えるとともに、広域の観光圏ならではの魅力を情報発信し誘客を図ります。

また、いずれの団体や組織についても、富士山をテーマやキーワードに構成されており、富士山の世界文化遺産登録による本地域への誘客効果が期待できることから、各団体や組織の活動に積極的に参画します。

３ 富士山静岡空港を活用した富士市、富士山の観光振興の推進

富士山静岡空港は、国内線に比べて国際線の利用者数が多いことが特徴であり、その数は、全国の地方空港の中でもトップクラスです。近年、中国、台湾、韓国等からの来訪者が増加しており、平成２５年度からは台北便も増便され、今後、東南アジア諸国の経済発展も予測されることから、今後の空港利用者も大きく伸びるものと予想されています。

このような中、本市においても、富士山静岡空港を利用し、富士山周辺エリアを訪れる外国人観光客の誘致受入を積極的に取り組む必要があります。

このため、富士山静岡空港を玄関口とし、県中部から、本地域、伊豆までの広域エリアの有力な観光スポットや食などを繋いだ、魅力的なコースの設定を行うとともに、エリア間による連携や効果的なプロモーション活動を展開します。